「複言語学習のススメ」による学び方の学び

大前智美[*1]・岩居弘樹[*1]
Email: omae.tomomi.cmc@osaka-u.ac.jp

*1: 大阪大学サイバーメディアセンター

◎Key Words　複言語学習、ICT 支援外国語学習、オンライン講座

1. はじめに

本稿は，大阪大学サイバーメディアセンターが中心となり 2019 年度より行っている市民講座「複言語学習のススメ」の実践報告である。

この市民講座では，普段触れる機会の少ない言語で挨拶や自己紹介などの表現を，複数の言語で並行して学習する。新しい言語を学習する際に，できるだけ文字を使わず，耳で聞いた音をそのまま表現することに重点を置き，何度も発音しながら音で定着させる学習スタイルが特徴である。

もう一つの特徴は，参加者がそれぞれ学習内容をビデオに記録し，共有することである。学習した言葉の音を自分自身が再現できているかどうか客観的に確認するだけでなく，そのビデオを共有することで，参加者同士が学び合い，自身の発音や表現方法を改善する効果もある。

本講座は，どの言語も学習する内容を統一しているため，別の言語を学ぶ際に，言語間の共通点や相違点に学習者自身が気づき，覚え方，学び方を学び，次の学びにつなげていく姿がみられる。本稿では，これまでの講座を振り返り，複言語学習の効果的な枠組み作りを検討したい。

2. 市民講座「複言語学習のススメ」概要

2.1 実施形態

市民講座「複言語学習のススメ」は 2019 年度から毎年 8 月から 12 月の間に，3〜5 回の講座を実施している。2019 年度は大阪大学豊中キャンパスにおいて対面で実施した。しかし，2020 年度から 2022 年度までの 3 年間は，コロナの影響によって対面開催が困難となり，Zoom によるオンラインで実施した。

2.2 開講言語

本講座は，大阪大学サイバーメディアセンター主催，人文学研究科共催で実施しており，言語の指導はサイバーメディアセンター，人文学研究科の教員と複言語学習に興味を持つ他大学の教員や留学生の協力を得て行なっている。

表 1 開講言語と実施形態

年度	開講言語数と言語	実施形態
2019	13 言語（ドイツ語，インドネシア語，ウクライナ語，デンマーク語，ヒンディー語，フランス語，ブルガリア語，ペルシア語，ポルトガル語，ロシア語，英語，韓国語，中国語）	対面
2020	13 言語（ドイツ語，インドネシア語，ウクライナ語，デンマーク語，ヒンディー語，フランス語，ブルガリア語，ペルシア語，ポルトガル語，ロシア語，英語，韓国語，中国語）	オンライン
2021	13 言語（ドイツ語，インドネシア語，ウクライナ語，デンマーク語，ヒンディー語，フランス語，ブルガリア語，ペルシア語，ロシア語，韓国語，中国語，スペイン語，タミル語）	オンライン
2022	13 言語（ドイツ語，インドネシア語，デンマーク語，ヒンディー語，フランス語，ペルシア語，ロシア語，韓国語，中国語，スペイン語，タミル語，タイ語，トルコ語）	オンライン

2.3 学習方法

2019 年，2020 年は，1 回の講座で 45 分を 2 セッションに分けて，前半と後半で別々の言語を学習した。参加者には申し込み時に言語学習歴とレベルを申告してもらっており，できる限り学習歴のない言語に割り当てた。前半，後半を通して，2 言語で挨拶や自己紹介の表現を学習することとした。

2021 年，2022 年の講座では，1 回の講座 45 分を 2 セッションで，1 講座内で複数言語を同時に学習した。例えば，1 回の講座でインドネシア語，トルコ語，スペイン語で，同時に挨拶（「おはよう」，「こんにちは」，「さようなら」）や自己紹介（「私の名前は〜です」，「〜から来ました」，「よろしくお願いします」），「ありがとう」，「〜が好きです」というような表現を学習する。「〜が好きです」という表現を学習する際には，いろいろな言語で色やフルーツの名前，野菜の名前などを交えながら語彙の学習も含めた。

それぞれの表現を，文字を使わず，音を聞いてその音を自分の口で繰り返し発音することで覚えるということに集中した。講座の途中でわからなくなった時には，何度でも講師に聞き，その音を繰り返し発音し身につけた。また，その覚えた表現を話す自分の姿をビデオに記録し，講師や他の受講生と共有し，学習の振り返りを行った。

3. 学び方の学び

3.1 学習内容の振り返りによる学び

複言語学習を市民講座で実施し始めてから継続してい

るのが，受講生自身が耳にした音をそのまま再現し，自分自身が話す姿で記録に残すということである。そのためのツールとして教育用動画共有ツール Flip[1]を使用している。

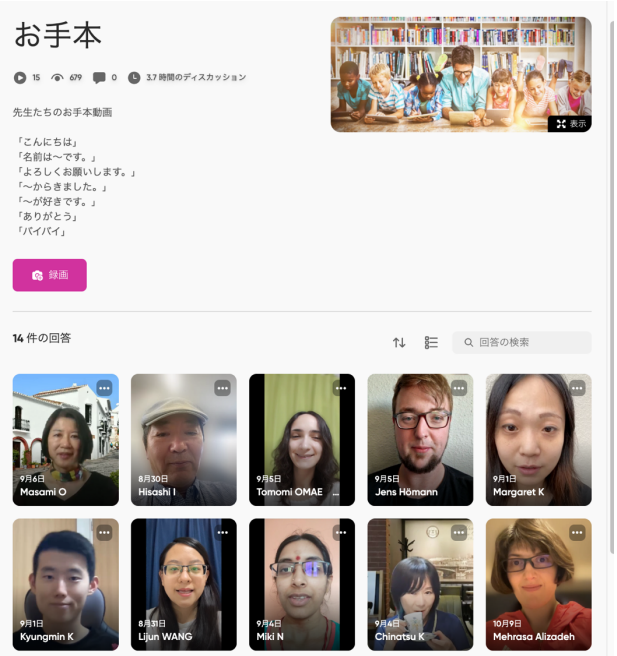

図 1　Flip を使った動画共有（講師のお手本動画）

各講座で学習した内容とお手本動画を参考に，自分自身が学習した内容を話す動画を受講生や講師と共有する。発音や表現のミスがあれば講師がコメントをすることでより正確に記憶・記録する，あるいは他の受講生が上手に話すビデオを見て，刺激を受けてさらに練習するという姿が見られた。

学習内容を自分自身の姿・声で記録することで，客観的に自分自身の学習を振り返り，学習言語に対する新たな気づきを得ることもある。また，どの言語も同じ内容を学習しているので，他の言語のお手本動画を見て，自分が学習した言語との類似点や相違を受講生自身が気づき，学びを深める様子が窺えた。

3.2　言葉の類似点・相違点についての学び

2021 年度の市民講座からは，一度の講座で 3～4 言語を同時に学習するスタイルに変更した。45 分 2 セッションで，前半には「こんにちは」，「私の名前は～です」，「～からきました」，「ありがとう」，「よろしくね」，「バイバイ」といった挨拶と自己紹介表現を学習する。例えば，ヒンディー語，韓国語，ロシア語，がセットの場合，「नमस्ते」，「안녕하세」，「Привет」を同時に覚えていく。何度も同じ音を繰り返し発音し，覚えられなかった時は再度講師に尋ね，また発音を繰り返し，音に慣れる練習を行う。

前半で自己紹介ができるようになったら，後半では色や野菜，食べ物，好きなものなど各回テーマを決めて，複数言語で学習する。フルーツをテーマにする際には，「黄色いバナナ」や「赤いりんご」など色とフルーツの名前をセットにして学習し，「私は赤いりんごが好きです」のように文章にして 3～4 言語で言えるようにする。このような学習を行う中で，「複数の言語を学ぶ事で何語と何語が似てる、など普段では気付かない発見があって楽しかったです」という意見や「スラブ語系（ロシア語とブルアリガ語）がかなり似ている一方で、タミル語とヒンディー語が驚くほど違うのが、不思議で面白かったです。」のような意見があった。似た言語だと思っていたのに全然違う音であることなどに受講生自身が気づき，言語への関心を深めている。音に集中して学習しているからこそ，音の相違・類似点に注目し，そこからその語のルーツを講師に尋ねるなど，音・表現にとどまらない学習に発展することもある。

3.3　文字から音・音から文字への学び

「複言語学習のススメ」は音で学ぶことを中心にしているが，受講生からの要望もあり，2021 年度と 2022 年度には 1 回ずつ文字講座を実施した。

表 2　文字講座実施言語

年度	言語
2021 年度	ブルガリア語，ロシア語，韓国語，ペルシア語
2022 年度	ロシア語，韓国語，ペルシア語

文字講座では，文字の成り立ちについての説明を受け，その後，自分の名前や挨拶表現などこれまでの講座で学習した音を，実際に文字で書く練習を行なった。

図 2　オンラインキーボード（LEXILOGOS）

ペルシア語やキリル文字を使うブルガリア語やロシア語はオンラインキーボード LEXILOGOS[2]を使いながら，文字の形・つながりを確認し，書く練習を行なった。

韓国語はハングルの成り立ち・文字の組み合わせ方を学び，自分の名前を書いてみる練習をし，その後，挨拶表現など音で学んだものを文字にするとどうなるのかを 50 音表を参考に参加者が書いたものを共有し合いながら学習

[1] 教育用動画共有ツール：https://info.flip.com/

[2] マルチリンガルオンラインキーボード：https://www.lexilogos.com/keyboard/

を行なった。また，韓国語はインタラクティブビデオコンテンツ作成ツール Mindstamp[3]を用いて，ハングルの基礎学習コンテンツを公開した。

図 3　ハングルの成り立ち（Mindstamp による動画教材）

どの言語も，すでに学習した音を文字にする中で，文字への興味が高まるだけでなく，ことばへの理解が深まり，発音がよりわかりやすくなるなど，音と文字のつながりを意識する学習が行われた。

3.4　講座終了後の学び

先述の通り，本市民講座では，1 度の受講で 3～4 言語に触れることになるが，受講しなかった言語についても学習したいという要望があり，2021 年度以降はオンラインデジタル教科書を，BookCreator[4]を使って作成し，公開している。

図 4　BookCreator によるデジタル教科書

本講座では，どの言語でも学習内容をほぼ統一しているので，デジタル教科書も統一フォーマットで作成し，それぞれの言語の音・文字を参加者自身で聴いて・見て学習することができるように工夫されている。

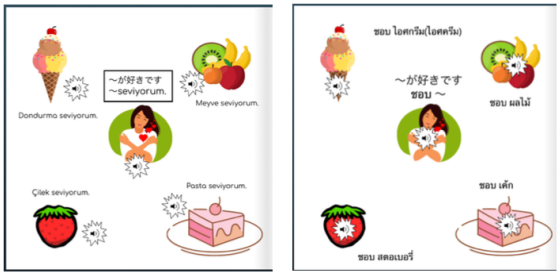

図 5　BookCreator で作成した教材（トルコ語・タイ語）

一度の講座で 3～4 言語を学習し，言語間の類似や相違を感じながら，言葉の学び方を学習した受講生が，同様の内容を別の言語でどう表すのか，どのような音を出すのかを確認しながら，自分自身で学習を進められるようになっている。

4.　おわりに

この市民講座における複言語学習の取り組みは 2019 年度から形式や内容を変化させながら 4 年間実施してきた。講座の目的は，世界にあるたくさんの言葉に触れて，自分で口に出してみることで，その言葉を知識として「知っている」というよりも，その言葉やそこにある文化を身近に感じ，世界を広げるきっかけにするということである。実際に参加者はそれを体感し，「複数の言葉を同時に学ぶ事で、文化の違いを知る事だけではなく、意外な共通点を発見できたりという楽しさがあると思いました。世界を立体的に見れるような、、、そんな楽しさを感じました。」といった意見があった。この取り組みをきっかけに世界を身近なものに感じ，学び方を学び，また別の言葉への学びに発展する活動ができていることがわかった。

今後は，参加者からの「もう一歩先」を望む声に対して講座内容の見直し，学習者間のコミュニティ作りなど，本講座をきっかけにつながる輪を広げ，継続的な学習につながる「場」の構築などの取り組みも加えたいと考えている。

参考文献

(1)　岩居弘樹：“医療系大学での「複言語学習のすすめ」の試み–対面授業とオンライン授業の実践報告と学生の声–“，複言語・多言語教育研究，No.8，pp106-116，（2020）
(2)　岩居弘樹，広瀬一弥，藤木謙仕：“小学校における『世界の言葉プロジェクト』の試みについて–ICT 支援遠隔複言語学習の一例–”，CIEC 春季カンファレンス論文集，Vol11，pp27-34，（2020）
(3)　岩居弘樹：“医療系大学における「複言語学習のすすめ」–ICT 支援によるオンライン開講の試みと可能性–”，複言語・多言語教育研究，No.10，pp124-139，（2022）

参考 URL

(1)　大阪大学市民講座　世界の言葉プロジェクト：https://sites.google.com/g.les.cmc.osaka-u.ac.jp/plurilingual/Plurilingual?authuser=0
(2)　BookCreator で作成したデジタル教科書：https://read.bookcreator.com/library/-MgPK3yY_7GNKIZNxO_9
(3)　Mindstamp で作成したハングルの成り立ち：https://myinteractive.video/w/ufbnsoSeYJsr

本研究は JSPS 科研費 JP 21H00543 の助成を受けたものです。

[3] インタラクティブビデオコンテンツ作成ツール：https://mindstamp.com/

[4] オンラインデジタル教科書作成ツール：https://bookcreator.com/